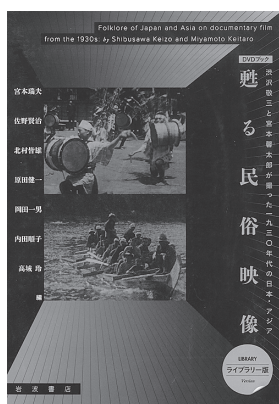


宮本瑞夫ほか編

『甦る民俗映像——洪沢敬三と宮本馨太郎が撮った
1930年代の日本・アジア』Mizuo Miyamoto et. al. ed., *Yomigaeru Minzoku Eizou*

山永尚美 | Naomi Yamanaga



宮本瑞夫ほか編

『甦る民俗映像——洪沢敬三と宮本馨太郎が撮った1930年代の日本・アジア』
岩波書店 / 2016年3月 / A5判 / 432頁 / 定価50000円+税

渋沢敬三(1896-1963)は、祖父である渋沢栄一(1840-1931)の後継者として若くして実業界に入ったのち、日本銀行総裁、大蔵大臣(幣原喜重郎内閣)などの要職を歴任した人物である。一方で、青年期から生物学者を志し、東京・三田綱町の自邸の屋根裏に郷土玩具などを収集する私設の博物館兼研究所「アチックミュージアム(屋根裏博物館)」を開設した(以下、アチック)[1]。自ら「民具」と命名した生活資料や水産史の研究に努めながら、私財を投じて多くの研究者を支援すると共に、様々な博物館建設や戦後は学際研究の必要性を呼びかけるなど、民俗学・民族学の発展に尽力した。

宮本馨太郎(1911-1979)は、民俗史研究者であり民具の収集者でもある。旧制中学時代に映写機や九・五ミリカメラのパテベビーを購入し、敬三と出会う以前から個人で民俗誌映画を制作していた。アチック同人になると、一六ミリコダックを携帯する敬三の調査旅行に同行し、自前のパテベビーで日本各地を撮り歩いた。戦後は研究と並行して、1949年の文化財保護法や1952年の博物館法の制定にも深く関与した。

1921(大正10)年より活動を開始した同人は、膨大な数の民具コレクションに加えて、敬三と馨太郎らによって1930年代を中心に撮影された民俗記録映画を残している。これらの記録映画を取り上げたのが本書である。

本書は、アチックの活動や功績について新たな成果を示すと共に、動的映像資料という資源を広く書籍の形で提供することで、諸研究の更なる発展を促すものである。加えて評者は、動的映像アーカイブの公開について、本書が一つの方法論を提示していると考えている。(なお紙幅の都合上、全体を通して敬称略となること、ご容赦願えれば幸いである。)

敬三没後50年である2013(平成25)年に向けて、2009年に一般財団法人MRAハウスが渋沢敬三記念事業実行委員会を立ち上げ、関係機関や個人によるプロジェクトが5年計画で推進された。その一環が、宮本記念財団によるアチック関係映像資料のデータベース化とその活用と公開に関する事業[2]である。また2014年には、常民研で国際シンポジウムが開かれている[3]。

宮本馨太郎フィルムは国立歴史民俗博物館(千葉県佐倉市)にて調査研究とテレシネ化[4]が進められ、2013年に「歴博映像祭ー映像民俗学の先駆者たち 渋沢敬三と宮本馨太郎」展で一般公開された。本書は映像祭の内容を更に発展させ、常民研と宮本記念財団の所蔵する作品を収録したディスク6枚組が同梱されたDVDブックの形式をとる。

全体の構成は表1の通りである。

論説編(映画の制作背景や意義などについての論考)、映像解説編(作品ごとの内容解説)、2氏の人物や功績についてのコラム、目録資料などから構成されている。ここでの目録資料とは、検索手段としての所蔵目録(finding aids)ではなく、一次資料を参考に原田健一が作成した上映記録や年表等を指している。作品は6つのテーマ毎にDVD収録されており、多分野の研究者が分担執筆している点の特徴である。

3 ―― アチックミュージアムと民俗記録映画

本書に収録された映画は、アーカイブズ学の観点からみれば、アチックという組織において生成された数々の記録の一形態と捉えることが出来る。組織活動を通じて生み出された

まえがき 宮本瑞夫

序文——出版に寄せて | 渋谷雅英

刊行にあたって | 編集委員一同

論説編

第1部 総論

- 1 渋谷敬三のアチックミュージアム——宮本馨太郎の仕事を中心として | 宮本瑞夫
 - 2 映像史における渋谷・宮本フィルムの価値とその保存・継承 | 岡田一男
 - 3 宮本馨太郎 始まりの映像民俗学——昭和初期における「郷土映画」の構想 | 北村皆雄
 - 4 渋谷敬三の二つの転回点——渋谷栄一、宮本勢助・馨太郎からみた映像と民具 | 原田健一
- [コラム] 渋谷家三代——栄一、篤二、そして敬三(井上潤)

第2部 記録映像の意義

- 1 方法としての現地上映会——現代に生きる映像資料 | 高城玲
 - 2 映像資料から見るハーモニアスデベロップメント——三つの「花祭」映像という実践 | 小林光一郎
 - 3 今、花祭の全記録に挑む——花祭の継承における映像記録の意義 | 佐々木重洋
 - 4 アチックミュージアムのウルサンでの活動とその現代的な意味 | 李文雄
 - 5 多島海の現代 | 高光敏
 - 6 記録と記憶 | 崔吉城
- [コラム] 『日本常民生活絵引』の課題(田中禎昭)

映像解説編

I——花祭

- ①『花祭をたづねて 三河北設楽郡 足込』小林光一郎
 - ②『花祭 三河北設楽郡にて』小林光一郎
 - ③『花祭 東京三田綱町邸』永井美穂
 - ④⑤『三河地方旅行』『三河北設楽の旅』伊藤正英
 - ⑥『奥三河の花祭 愛知県北設楽郡東栄町 下栗代の花祭』宮本瑞夫
- [コラム] 花祭の現状(山崎一司)

II——やま・かわの民俗

- ①『地理風俗資料 奥利根の流れ 群馬県利根郡水上村』内田順子
 - ②『片品川に沿って』内田順子
 - ③『昔時の運輸制度、伊那街道の中馬』櫻井弘人
 - ④『越後三面行』佐野賢治
 - ⑤『三面風景』原田健一
 - ⑥『男鹿、能代、藤琴、石神、八戸』昆政明
 - ⑦⑧『谷浜』『桑取谷』真野俊和
 - ⑨『粟島所見』原田健一
 - ⑩『越後三面の記録 第三篇刳舟の製作 第四篇狩猟』原田健一
- [コラム] 宮本馨太郎の民具研究(田辺悟)

III——うみ・みずうみの民俗

- ①『飛鳥と津軽半島』新垣夢乃
- ②③『その日帰り 伊豆大島』『椅子石廊崎と堂ヶ島』神野善治
- ④⑤『八丈島の記録 島の生活』『地理科教材映画 八丈島の話』林薫
- ⑥『佐渡』池田哲夫
- ⑦『或る漁村の風景』小島孝夫
- ⑧『霞ヶ浦のほとり』榎陽介
- ⑨『郷土舞踊 古念佛踊』坂本要
- ⑩『霞ヶ浦にて』榎陽介
- ⑪『純教材映画 尋常小学五、六年用 十和田湖』昆政明
- ⑫『田澤 仙岩峠 澤内』昆政明
- ⑬『安土・沖島』辻川智代

〔コラム〕アチックミュージアムにおける高橋文太郎の活動(高田賢)

〔コラム〕渋沢敬三と胡桃沢勘内(胡桃沢勘司)

あとがき 佐野賢治

目録資料(作成=原田健一)

宮本馨太郎フィルモグラフィ

アチックミュージアムにおいて映画・写真を用いた調査

アチックミュージアムの映画の上映記録

宮本馨太郎、パテール・シネ関係の上映記録

DVD収録作品リスト

※反転数字(黒)はDVD非収録。

IV——しまのくらし

- ①『十嶋鴻爪』小島摩文
- ②③『鹿児島県下硫黄島の太鼓踊』『薩南十島』羽毛田智幸
- ④『隠岐之島 景観』小林光一郎
- ⑤『隠岐』小林光一郎
- ⑥『塩飽』田上繁
- ⑦『志摩崎島』野村史隆
- ⑧『糸満(海上)』小林光一郎

〔コラム〕ヤマト・琉球の接点、十島(下野敏見)

V——くらしと行事

- ①『うちのは出来るまで』内田順子
- ②『田中喜多美氏 藁靴製作』佐々木長生
- ③『イタヤ細工 製作者 渡部小勝君』成田敏
- ④⑤『古志郡竹沢村角突』『越後竹沢村角突』山田直巳
- ⑥『直江津片田家行事・白萩村アワラ田植』五十嵐稔/内田順子
- ⑦『珍しい・深田の田植』内田順子
- ⑧『あわらの田植え』内田順子
- ⑨『足半作り』佐々木長生

〔コラム〕市川信次・記録映画撮影随行記より「アワラの田植え」(市川信夫)

VI——アジアへのまなざし

- ①『多島海探訪記』李恵燕
- ②『朝鮮 蔚山達里にて』李文雄
- ③『台湾高雄州潮州郡下 バイワン族の探訪記録』笠原政治
- ④『オロッコ・ギリヤークの生活』大塚和義
- ⑤⑥⑦『満州』『満州 湯崗子』『満州 飛行場にて』渡部武

記録物である映画群と、敬三と馨太郎という二氏の活動歴の概略を、映画の作品タイトルを交えつつ以下で辿ってみる。

3-1: 敬三と馨太郎

馨太郎は昭和初年頃からパテベビーで映画撮影を始め、映画論の執筆(私家版「映画断章」など)も行いながら、立教大学入学後は「小型映画研究会」を組織し、数多くの映画作品を残している。その映画について、北村皆雄は論説編の論考で(便宜的と断りを入れつつ)次の通り分類している。[1]フィクション・実験映画、[2]学園ニュース——立教大学時代、[3]我が家の記録、[4]民俗誌映画——対象地域の生活と民俗探訪・調査——この内、本書には[4]に該当する作品が多数収録されている。

一方の敬三だが、写真を好んだ父・篤二(1872-1932)の影響もあったのか、横浜正金銀行ロンドン支店に赴任の際(1922-25)、発売されたばかりの十六ミリシネコダックを彼の地で購入している。当初の撮影対象は、祖父・栄一を始めとする渋沢家や故郷の血洗島など身近な事象であった。赴任中は中断されていたアチックの活動が再開されると(「アチック復興第一回例会」開催、1925年12月4日)、敬三は多忙な銀行業務の傍ら、生活用具の蒐集と並行して各地を撮影して歩いた。

馨太郎の回想によれば、風俗史・服飾史研究家の父・勢助(1884-1942)に同行し奥利根地区を撮影した際の記録映画をアチックの例会上映したことが、二人の出会いのきっかけだったという(『地理風俗資料 奥利根の流れ 群馬県利根郡水上村』『片品川に沿って』※以下、映画作品名は『』で統一)[5]。

3-2: 花祭

敬三の著作「旅譜と片影」に基づいて作成

された巻末年表「アチックミュージアムにおいて映画・写真を用いた調査」によれば、早川孝太郎の調査フィールドであった奥三河(愛知県)の花祭に最初の調査旅行が行われたのは1928年であった。花祭は三河の各地区に伝わる神事芸能で、夜を徹して様々な舞が行われ、現在は国の重要無形民俗文化財に指定されている。敬三、馨太郎のほか、父・勢助、早川、折口信夫、今和次郎ら総勢9名によって30年1月に行われた3度目の調査では、『花祭をたづねて 三河北設楽郡 足込』が撮影されている。

アチックが撮影した採訪先やその作品タイトル一覧は、原田による前出年表に時系列で記されている。これを馨太郎のフィルモグラフィに重ねると、本書に収録された作品は、①アチックに関連して敬三が制作した映画ないし②馨太郎が制作した映画、③アチックとは別の民俗調査で制作された馨太郎による映画、と大別することができる。(※敬三のフィルモグラフィは本書不掲載。)

例えば、渋沢邸改築と早川の著作「花祭」出版を記念して、1930年4月に三田綱町の渋沢邸に中在家・足込の人々が招かれ花祭公演が行われた。この時の記録『花祭 東京三田綱町邸』は①敬三の制作であるが、前出の『花祭をたづねて』は②馨太郎による制作という具合である。勢助に同行した『奥利根の流れ』のような作品は、アチックの調査ではないため③である。

なお、1933年の三河調査では敬三が『三河地方旅行』を、馨太郎が『三河北設楽の旅』を各々撮影するなど、調査に赴いた先で二氏が分担してカメラを回すこともあった。

3-3: 活動範囲の広が^り

1932年、静岡での「豆州内浦漁民史料」(大川家文書)の発見を契機にアチックに隣接

して水産史研究室が新設され、水産・漁民史料の整理研究が始まると、その関心は海・湖・島にも向かい始めた。

1934年に行われた薩南十島の調査旅行は、アチックが試みた初の合同調査である。前年からの定期船就航が島の暮らしに影響を与えない内にと、同人に加えて地理学や人類学などの研究者ら総勢23名がトカラの島々を訪れ、島の暮らしや自然、無形民俗芸能などを記録した(『十嶋鴻爪(じゅうとうそう)』『鹿児島県下硫黄島の太鼓踊』『薩南十島』)。この調査は、戦後に敬三が呼びかけた学際的な九学会連合調査の萌芽が見られる点で重要である。また同時期には、海や湖を巡った映画も制作されている(34年『隠岐之島 景観』、35年『霞ヶ浦にて』など)。

国内各地と並行して、調査範囲は当時日本統治下だった朝鮮(36年『多島海探訪記』『朝鮮 蔚山達里にて』)、台湾(37年『台湾高雄州潮州郡下 パイワン族の探訪記録』)、北方樺太(38年『オロッコ・ギリヤークの生活』)にも及んだ。また、敬三は銀行の出張で訪れた満州を、慌ただしい旅程の合間を縫って十六ミリで記録している(35年『満州』『満州 湯崗子[DVD非収録]』など)。なお、当時の朝鮮を撮影した意義については、韓国から李文雄、高光敏、崔吉城の三氏が本書に論考を寄せている。

アチック初の共同研究(『所謂(いわゆる)足半(あしなか)』に就いて[豫報]1935年、36年刊行)もこの頃にまとめられた。日本各地で収集したこの半草履の履物に対しては、整理、測定、文献収集等の調査に加えて、レントゲン写真や十六ミリでの製作工程の記録(34年『足半作り[DVD非収録]』)が行われている。

3-4: 撮影記録活動の収束

敬三にはかねてから民族学博物館の構想があり、またアチックは資料の収蔵場所不足

という課題に対応する必要があった。有力同人の高橋文太郎の協力を得て、東京郊外の保谷村(現西東京市)に博物館施設を建設、コレクションを日本民族学会に寄贈し、39年に日本民族学会附属民族学博物館が開館する。資料整理と研究は馨太郎を含む同人らが研究員の立場で行い、アチックによる収集も継続して行われた。また同時期には、渋沢栄一の顕彰に端を発する経済史専門の「日本実業史博物館」建設に向けての準備も開始されている。

しかしながら1937年に日中戦争突入、41年太平洋戦争が開戦すると、時局の影響から物資は元よりフィルムの入手が徐々に困難となる。敵性語の使用を控えるべくアチックミュージアムも42年にその名を「日本常民文化研究所」に改称し、同人の応召なども重なって研究は中断するに至った。民族学博物館は学会の改組や施設転用の事態に遭い活動が停滞、実業史博物館は物資不足で建物が竣工せず計画が頓挫した。

1943年にパテベビーで家族を収めたものの、馨太郎が戦前最後に制作した映画であった。再開は終戦を待たねばならず、戦後ようやく生活と研究に落ち着きが戻ると、馨太郎はまず八ミリカメラを、それから十六ミリカメラ2台を購入し、再び調査に携行した。だが、1962年撮影の『奥三河の花祭 愛知県北設楽郡東栗町 下栗代の花祭』や『あわらの田植え』のように、撮影は子息(瑞夫氏)に任せることが多くなっていった。

敬三は42年、時局に乞われる形で日銀副総裁となり、44年総裁に就任、戦後は幣原内閣の大蔵大臣として種々の経済政策を断行する。渋沢は財閥解体の対象となり、敬三も公職追放の処遇を受け、解除までの数年を過ごすことになった。なお、原田による前出の年表では、1937年5月の『志摩崎島』

を最後に、敬三による民俗記録映画の制作は途絶えている。

4 ——— まとめ

以上、アチックミュージアムで撮影された映画について、作品タイトルや収録論考の紹介を交えつつ、時系列で辿った。本書は、アチックの組織活動や撮影者個人の歴史、個別の作品分析やその意義などについて、複数の視点から分析を試みた研究報告書であると同時に、関連する資料や対象となる映画自体をDVD収録したという点で、動的映像資料を広く公開するにあたっての利用まで含めた一つの実践例となっている。

映画資料群は本来すべてアチックの調査記録として制作されたものだったが、その後フィルム原版の収蔵先は分かれ、現在は敬三の撮影・制作したものは神奈川大学日本常民文化研究所(以下、常民研)ならびに公益財団法人渋沢栄一記念財団渋沢史料館に、馨太郎の撮影・制作したものは一般財団法人宮本記念財団に収められている。元は形態のまとまった資料群である記録映画は、書籍にまとめられたことで個別の申請等なく一度に自由に利用(視聴)でき、かつDVD形式という汎用性をもって保存されている。動的映像を視聴する場合、可能な限り当初の真正な状態に近づけて再現するための機器や技術が必要となるが、関係機関の協力の下、教育や研究に資する資料が手に取りやすく閲覧しやすい形で利用に供されていることの意義は大きい。

所収内容の紹介に戻る。映画に対する仔細な分析や考察については、論説編の小林光一郎、佐々木重洋両氏の論考が詳しい。映像解説編の作品分析や巻末の作品リスト(撮影・編集年月日、フィルム形状や分数などについて記載)等は鑑賞時の参考になる。また、映画

の復元と保存に関し、敬三作品は下中記念財団EC日本アーカイブズ、馨太郎作品は株式会社ヴィジュアルフォークロアと内田順子がその中心的役割を担っており、1970年代から始まる一連の作業記録を岡田一男がまとめている。加えて利活用という点では、現地上映会等を通じて鑑賞者が身体動作や感情を共有することの意義について、常民研の高城玲が記している。映画そのものと共に、資料に関する基礎情報や考察も同時に確認できるという利用形態に、冒頭で述べた動的映像アーカイブ公開にあたっての一方法論が提示されていると評者は考える。

ところで、ここでアチック資料全体の収蔵先の変遷について確認してみる。資料の寄贈を受けた民族学博物館の活動は、太平洋戦争の影響を受け縮小するも、1952年の博物館法施行に伴って再開されている。しかし施設の老朽化に伴って、資料は62年に文部省史料館(現国文学研究資料館)に移り、のちに民具類は国立民族学博物館に継承された。(なお、敬三フィルムを所蔵する常民文化研究所は50年に財団法人化され、82年には神奈川大学の付属研究所となり現在に至っている。)

このように、全体としてのアチック資料の変遷については上記の言及があったものの、本書の主題である記録映画自体に関しては記述が少なかった。映画資料群について、いつ頃どのような理由で全体から枝分かれしたのか、また敬三フィルムについてはなぜ収蔵先が二機関に分かれたのか、評者としては詳しく知りたい所であった。本書はアーカイブズ学に関する書籍でないが、以下はその学問に身を置く立場からの提案である。映画を所蔵する機関の名称だけではなく、資料が各機関に収蔵されるに至るまでの経緯(および可能であれば根拠となる関連資料の所在等)のようなコンテキスト情報の明記があれ

ば、動的映像および関連資料の資源化という意味で、本書の有用性が更に増したのではないか。それは、アチックの組織活動や二氏の推し進めた民俗学、また動的映像といった諸分野の研究に関連して、非常に有益な情報になったかと思う。

しかし、本書が映画資料群と利用者を結ぶ一冊となっていることは間違いない。敬三は、「自分等が特殊の敬愛と同情を持つ民俗学に、今迄、生物学的とでも言いたいような、実証学的研究法があまり用いられておらぬことを、いささか不満に思っていた」と記しているように、実物資料の積極的採集とその目録作成などに加えて、記録映画という非文字資料を活用することで、調査研究に新たな視点を取り入れようとした。映画フィルムに記録された地域伝来の踊り、漁の風景、履物を編む

工程といった光景は、動態として眼前に再現され、文字資料とは別の観点から当時を検証することの一助となってくれる。所収の映画は教育や研究といった諸分野に貢献をもたらすだろう。

アチックの目指すものを敬三は次の通り示している。

人格的に平等にしてしかも職業に専攻に性格に相異なった人々の力が仲良き一群として働く時その総和が数学的以上の価値を示す喜びを皆で共に味わいたい。チームワークのハーモニアスデヴェロップメントだ。自分の待望は実にこれであった。

映画を媒介として、正にこの「ハーモニアスデヴェロップメント」が実現しているのが本書である。

1 ——『GCAS Report』Vol.5 掲載の難波秋音「『渋沢敬三没後50年 屋根裏部屋の博物館 ATTIC MUSEUM』」(書評)も参照されたい。

2 —— 宮本記念財団「渋沢敬三及びアチック関係映像資料のデータベース化とその活用、公開」<http://shibusawakeizo.jp/project/> 2016.9.30 アクセス。

3 —— 宮本瑞夫「パネル報告 映像に見る常民生活の伝統と再生」『国際シンポジウム報告書V 渋沢敬三の資料学——日常史の構築』国際常民文化研究機構、2014年10月31日。

4 —— 人間文化研究機構連携研究「歴史研究資料としての映画の保存と活用に関する基盤的研究」(2010-2014年度、研究代表者・内田順子)

5 —— 巻末のフィルモグラフィーでは、奥利根の2作品は1930年5月と9月の制作とされており、同年の正月に一緒に調査に赴いていることを考えると、例会での上映時期ははっきりしない。(本書、p.86.)